

野外調査で標本を収集し研究する

大切に保管し広く公開し後世に伝える

日常使いの和名, 共通語としての学名

現在の地球上にはわかっているだけで175万種を超える生物が生きています。人類はこのすべてに固有の名前をつけてきました。それは多様な自然の中から際立たせ、正確に他の人に伝えるためです。それぞれの民族や国によって生物の名前は独自のものが使われていて、日本には和名があります。和名は日常の使用にはとても便利ですが、言葉が違う外国の人にはうまく伝えることができません。そのため、すでに知られているすべての生物には国際的に統一された名前である学名が制定されています。学名は法律と同様な厳格な規則のもとに運用される命名規約に従って使われています。生物によって従うべき命名規約は異なり、例えば植物は6年ごとに全面改訂される「国際藻類・

菌類・植物命名規約」が適用されます。この規約には6つの原則が巻頭に掲げられているのですが、第2原則には「分類学的群の学名の適用は命名法上のタイプに基づいて決定される」と書かれています。

分類学的群とは難しい言い方ですが、^{へんしゅ}変種や^{あしゅ}亜種、^{しゅ}種や^{そく}属といった、階層的に並んだそれぞれの階級に分類される群(個体の集まり)のことです。新しく見つかった種や属を論文として発表する際には、詳細な記載とともにタイプを指定しなければなりません(現行規約7.1条)。ほとんどの場合、このタイプは標本なので、タイプ標本とも呼ばれます。学名の妥当性を再検討する際にはこのタイプ標本がもっとも大切な基礎資料となります。このため学名を安定的に間違いなく運用するには、タイプ標本をしっかりと保

管して未来に伝える必要があります。タイプ標本はとても大切なものなので、個人の家ではなく広く公開された標本館に保管されるべきであると勧告されています(現行規約勧告7A)。

ひとはくのタイプ標本

ひとはくには様々な生物の多数の標本が保管され、研究や普及活動に幅広く活用されています。実数は200万点を優に超えています。今回はその中で、コケ植物のタイプ標本を紹介しましょう。

国内外の野外調査(写真1-5)によって収集された

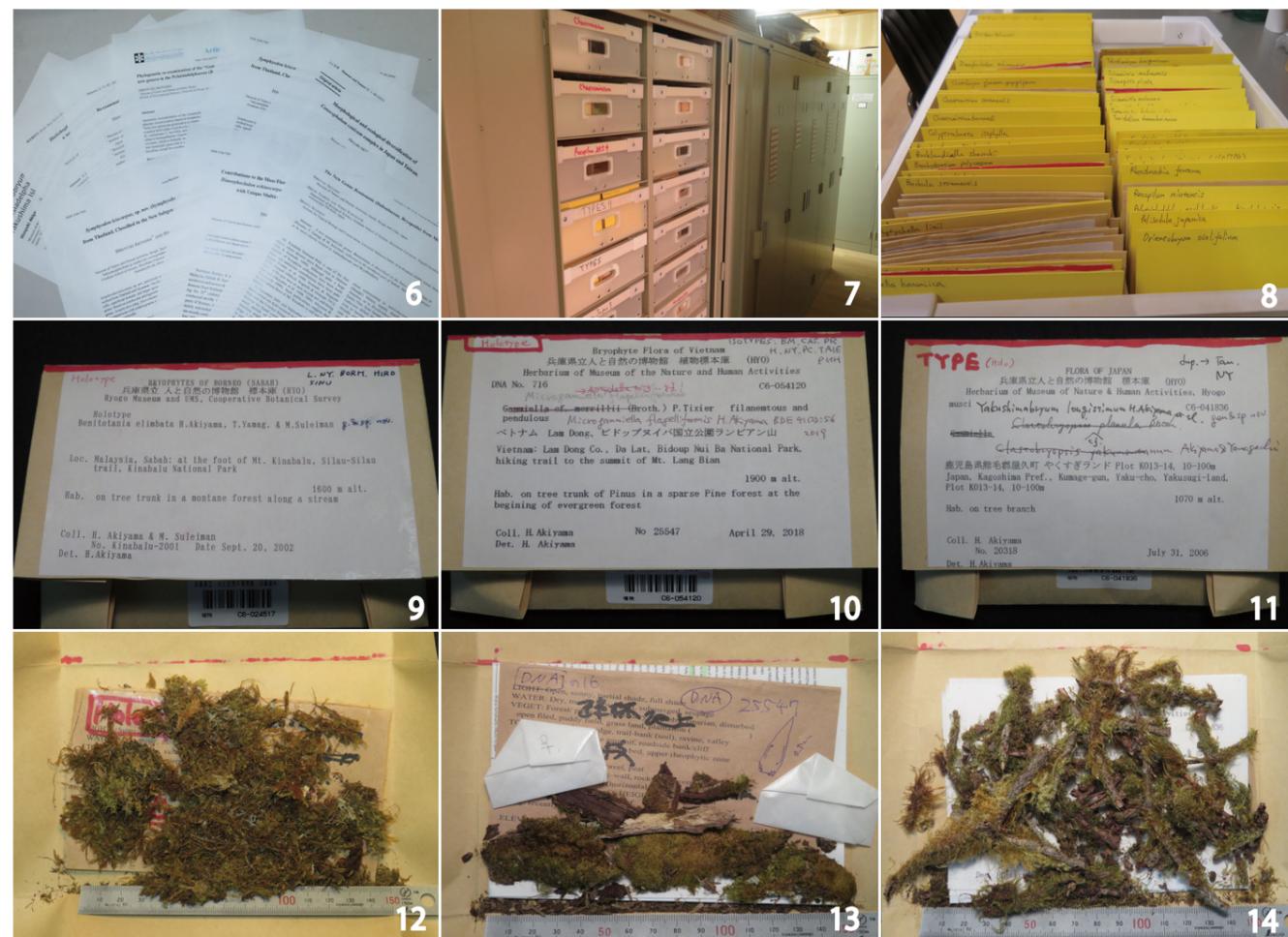
数多くの標本を研究室に持ち帰り、形の特徴や遺伝子の配列を使ってその正体を明らかにします。収集品を標本にするにも膨大な時間がかかるのですが、それはまた別の機会に。研究の結果、新種や新属が見つかったら、学界に発表するための論文(写真6)を執筆・出版しますが、論文の中で証拠として引用されたタイプ標本はひとはくの植物収蔵庫に保管されます(写真7-14)。そして世界に公開され、後世の研究のために大切に保管されます。収集、研究、保管と公開、これら3つの機能は収蔵庫の大切な役割なのです。

秋山 弘之(系統分類研究グループ)



写真1-5 コケ植物の野外調査の風景 1: テントを撤収して行動前に記念撮影(東カリマンタン, インドネシア)。2: 樹幹着生の蘚類を探索(タイ, チェンマイ)。3: ボルネオ島で50年ぶりに見つかったカワブチゴケを手にして喜ぶ(東カリマンタン, インドネシア)。4: 屋久島での調査の様子。5: 木を倒して橋をかけ、道無き道を踏破する(セラム島, インドネシア)。

写真6-14 論文とタイプ標本 6: 新属新種を記載報告した論文。7: コケ植物が収蔵される標本棚の様子。8: タイプ標本はまとめて保管されている。9&12: 迷うこと無く新属とした *Benitotania elimbata*。10&13: 様々な検討の後に新属新種とした



Microgammiella flagelliformis, 11 & 14: 同じく紆余曲折の末に新属新種としたヤクシマコモモチイトゴケ。これらの標本のラベルに書き込まれた文字を見ると、結論にいたるまでの研究者の思考の経緯や迷いなどを読み取ることができる。

表紙の説明 上段左: ヤクシマコモモチイトゴケ(鹿児島県屋久島), 上段右: ナガレウニゴケ(宮崎県尾鈴渓谷), 中段左: マツタケジャゴケ(兵庫県横河渓谷), 中段右: キノボリヒメツガゴケ(鹿児島県屋久島), 下段左: *Microgammiella flagelliformis*(ベトナム, Langbian), 下段右: *Benitotania elimbata*(マレーシア・キナバル)。